

現代短歌分類辭典

第十六卷

津端修編纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辭典

第 十 六

現代短歌分類辞典

16

昭和四十二年四月二十日初版発行

定価四五〇円

著者兼
発行者
津端修

東京都文京区春日一丁目六

印刷所
岩佐印刷所

東京都中野区上高田二丁目九

発行所
イソラベラ社

電話三八七局八四二九番
振替東京六七三四一番

目

次

足(二)	一、〇四八	歌数	一	頁数	あじあ人	二	歌数	二	頁数	二三
一の跡	八		八		亜細亜日和	一		〃		〃
一裏	二四		〃		亜細亜広原	一		〃		〃
一音	九		九		足裏	五		〃		二四
一甲	四		〃		芦柄団扇	二		〃		一九
一下	三		三		足音	二六		〃		〃
一爪	二		二		足音す	一		〃		一四三
一ひら	一		一		足音ども	一		〃		〃
一辺	八		〃		足重に	一		〃		〃
一指	九		九		あしか	四		〃		〃
亜細亜(あじあ)	三		七		阿字ヶ池	二		〃		一四三
亜細亜洲	一		一〇〇		あしか岩	二		〃		〃
足跡	一四		〃		足利(地名)	三		〃		〃
亜細亜野	二		一三		足利(人名)	三		〃		一四四
亜細亜の海	一		〃		足利学校	二		〃		〃

足搦み
 足柄嶺
 足柄山
 足柄湾
 芦刈（書名）
 葦刈
 あしかりーける
 あしかりーなむ
 葦刈り男
 あしかり小舟
 あしかる
 足軽に
 悪しき
 あしき
 安食
 あしき川
 脚疵

一 一 一 一 七 一 一 一 一 一 二 一 一 一 九 一 一

一五 〃 〃 〃 一六 〃 〃 〃 〃 一五 〃 〃 〃 一五 〃 〃 一三

あしぎぬ
 安食の町
 悪きを払ふ
 悪しく
 葦茎
 脚ぐせ
 阿しく婆仏
 葦株（あしくひ）
 足首
 芦久保川
 足気
 悪し気
 葦毛
 足蹴
 足毛
 足芸
 あしけく

二 一 一 四 四 八 一 一 五 一 一 一 四 三 一 一 三

〃 〃 一八 〃 一六 〃 〃 一六 〃 〃 〃 〃 一七 〃 〃 〃 一五

悪しけれど

あしこ

足腰

足—ごとに

芦—ごとに

あじこのはま

足先

足ざはり

葦鋤いろ

悪しざまに

足下

足繁に（あししに）

足痺しーて

あじしま

足白

葦簾

芦洲

亞細須岐乃高比根巳貴

足滌ぎ

足ずり

足摺

足摺岬

足ずりし

足ずりしーけむ

足擦りしーけり

あしずりの岬

足底

朝(あした)

合計

一八七

//

"

一八七

一八八



一八九

11



三三三

あし②【名詞】〔足〕〔脚〕

小崗子シヤオカンズにふたり足とどむ雑然と躊躇いざしなくして伝来いざしの燠いざしあり⑧

シャンゼリゼーの往来びと急ぐともなくて飾窓しょういんどうに足とどめゐつ⑤

銃丸にこはれし屋根の隙間より一すぢ通る日の脚白し

熟蕃におぶはれ渉る溪の水わが足におよびたぎちけるかも

棕櫚の葉は月夜の空にするどくて脚痛む吾を窓にすがらしむ

春曉にしっとりぬれし土ふめばわが足白くうつくしく見ゆ

食しょくの後風吹く方に足のべて眠れる妻を見ればあはれなり⑪

白梅の梅を往き来に見て通る或る日は足をとどめて仰ぐ⑤

白樺の林の下の真砂清み踏み行く足にかそかにも鳴る

白きぬの沓下ながく、肉おきのゆたけき、脚をもちてゐるかも③

白雲の八重山の水に足は濡れ生けらく間なく我を守らむ

斎藤 茂吉

朝吹 磯子

美禰 国樹

加納 小郭家

塩川 三保子

鈴木 保

松村 英一

半田 良平

窪田 空穂

西村 陽吉

島木 赤彦

足

足

白雲の山深くなり足つまづき現し身われを幽かに思ほゆ③

米磨桶の水をあがりて真赤なる蒸気立つ脚ををとこ拭きをり③

白さが羽ばたきそこねよろめくに支ふる細き脚と思へり

白鷺は長くか細き脚垂れて飛び立ちたれど高くは飛ばず

白鷺は梢に居りて枝うつる羽ひろげつつ足長く見ゆ

しらじらと湿布せる足の片方が春夜の灯かげに照らされてをりぬ

白々と八重くちなしの花にほふ門歩みつつ足浮くものか

知らず知らずわが足鈍る君も鈍る恋の木立の静寂のなかに

城址のさびれもとほりただよへる暮色に足は早まり歩む③

白泡を底まき返しゆらくふち見るにたへずも足はすくみて

白き足するするのびてはまぐりが器の底を探りゐるあはれ

白き蝶追ひかけてゆく幼子のあらはな足に春陽まつはる

島木赤彦

中村憲吉

塩川三保子

鵜木保

佐藤志満

君塚幸子

伊藤嘉夫

若山牧水

森山汀川

堀内卓

田崎竹子

清水美恵子

代田踏みこのせはしきを思はずして籠らるべしや足病めりとも

篠原志都児

白灰をかき探しては拾ふ骨これの太きは足にてありしか①

川崎杜外

神経痛なほれるらしとわが物の左の脚をたふとみて撫づ

窪田空穂

神経痛を足の疲れを言はぬ妻今日舟酔をいはざるらしも③

森山汀川

新宿に出でて来るまでに脚いたむ甲斐の高山踏みたる吾の⑫

松村英一

新宿の大京町といふとほりわが足よわり住みつかむとす⑮

斎藤茂吉

しんとして、声あるものか、わが脚は、明星が嶽の草に触り行く

釈 迢空

深夜みあげる煙突に足がぶらさがってゐる……昼間煙突を塗りかへてゐたんだ⑧

清水 信

素足よし白しちひさしその足にわれは踏まれてあらむとねがふ

生田 春月

スカートに脚あらはしつをとめらは大きゴム毬^{はふ}投りてあそぶ

宇都野 研

管の根の永き春日をゆきくらし宿に帰れば足痛みけり

篠原志都児

足

足

過ぎし人心に持ちて春寒き朝の小床に足かがめ居り①

森山汀川

過ぎゆきしことは悔いじと暁を入りし臥処に足をあたたむ

柴生田稔

すこし釘の足さす心地萩が根にいとどのなける夏かげの道⑧

釈迢空

少しまた足の冷く心地あし思出つらきこの病かな③

柳原白蓮

健かにあるべき脚ぞおぞやおぞや電車に乗りて弱くななしそ①

花田比露思

篠懸はかく伸びたれば足とどむ歩道のうへに汗おとしつつ③

山下秀之助

すずなちる深江のみちのはたにたちまちつつあれば足だるみかも⑧

安江不空

鈴ふれば児は両手ふる足をふる手ににぎらせば首もふるのか①

清水信

すすむべき道ぞと思へどためらひぬ足を痛めしわれや旅人④

尾上柴舟

すっぽりと蒲団をかぶり 足をちぢめ 舌を出してみぬ、誰にともしに②石川啄木

捨て椅子の脚に芽だちの青々しここに若草うまれ居にけり⑩ 釈迢空

すでにして足のむくみを覚ほゆるうつしみ兄の命せまるか② 藤森朋夫

砂庭をいましよこぎる鹿の子の脚のほそきを子のさしていふ④
砂の上に足なげ出して休みつつ砂の波紋のいくつを手に消す①
喫ひつきし煙草を足に踏み消してしばらくの間は心うつろに⑦
住吉の長き浜辺を歩み去るここに老いゆく海女の足太く

ずるずると引込まれゆく悲しみの遣り場もなくに足ちぢめ寝る④
すわりつつわが足冷ゆる仕事場になにごとなけど一日寂し①

陶窯のうしろの井戸に春の土踏みきしあしをすすぎつるかも⑧

水田の泥青くにごして逃げゆくはすでに脚もおたまじゃくしの群れ
すんなりと女学生の足伸びてあり春のほこりをあげてあゆめり

清涼殿の階をのぼりて鳴板の音こととするに足をおそれき④

少女等が脚の一聯動くときエヂプトの浮彫おもひつつ居り⑩

小兒麻痺の足ひき歩む児をつれて睡蓮の花咲く池に来つ

足

松田 常憲

山下 陸奥

松村 英一

井上 雪下

小暮 政次

高田 浪吉

安江 不空

中村 正爾

小笠原文夫

中村 憲吉

斎藤 茂吉

五味 保義

足

小兒麻痺の足ひきて地を這ふ如し備前の国より来し小野道子⑬

石人の足折れたるは折れしままに黙し立てるも我を仰ぎて②

石油の香ただよふ水に蝦と蟹浮びあがりて小さき足をもがく

せせらぎに脚をひやして黒の馬うれしくやあらむ長き尻尾振る

雪溪をふみなづみ行きて足おもしあるにまかせて雪とりて喰らふ②

忙しさにわれあり馴れて夜深く坐り疲れし足を揉ましむ①

背も腰も痛まぬこよひのびのびと足そろへたり寝釈迦のすがた⑤

背を向けて脚の三里に炙据うるひそけき妻よ汝も老いにけり⑪

善光寺七のみ坂をのぼりゆくわが脚たゆし導きたまへ⑨

先生のむかしの家の前をとほり心さびしも足をとどめず③

先生は痛き足のみ歎きます寂しきことはせんなしとして②⑩

千人の足をとどめて縫ふ針におもひをこめぬ千度勝てよと

松村英一

下村海南

宇都野研

窪田空穂

小宮良太郎

森山汀川

岡麓

松村英一

太田水穂

島木赤彦

与謝野晶子

相良由紀子

線路下の枯草原に足のばしひるの日あみてひるげす工夫ら⑦
素麺の煮え立ちくれば騒ぎ出しわが足に頭をすりつくる猫④
削ぎ竹の鋭きみちを踏みなづみ老のわが足よろよろと行く⑬
外歩きも出来ぬ我が身となりにしと足摩りつつ父はのたまふ
その足がその太腿がその腕が私の眼つきをけだものにする

その日よりまた足踏まずたはぶれはおさおさ知らぬ少女となりぬ⑧

その日われしとねを蹈みて思ふこと足に親しくわが墓を踏む

そのむかし祖師がふみにし山の岩一の窪みにいま足かくる⑩

ソファより投げたる脚の何ごとか謎のごとくに見ゆる秋の暮①

岨をゆく人に追ひつき水わたる足つめたしといひにけるかも②

そよ風に足をまかせた散歩です柳の揺れがしっくりとくる②

そら！ と云へば手も足も舌もなくなる紙面を通ふ思想！③

足

佐佐木信綱

長谷川銀作

松村英一

関 卯一

上 田 穆

与謝野晶子

堀 口 大 學

尾 上 柴 舟

富 田 碎 花

斎 藤 茂 吉

清 水 信

清 水 信

足

蚕豆は桑のうねまに青々し足にさやればつめたし足は

中島哀浪

大黄河が朝の光に見えくれば声あげて兵は足を早めぬ

渡辺克巳

太鼓橋欄干橋をわたるとき幼子我は足あげ勢ひし

北原白秋

橙の実たわわになれる木の下に半癒えたる足つよめたつ⑭

尾上柴舟

大東京年のなだれのひた押しに最後の秒を傾く日の脚

所三男

大熔鉞炉にのぼりきたりてわが足のふるへはいはず友をよびたり④

長谷川銀作

大理石の足美しき立像に百合科の花を配したる苑③

真鍋美恵子

唐黍の赤毛のふさもなつかしと街上を来て足をとどむる④

斎藤茂吉

陶房に住みついてより足わるき妻の歩行が軽がると見ゆ

菊山当年男

田植すとぬれ股引に足通す雨の朝は何かわびしき

藤井悍

絶間なく広告塔の声すれど人は慣れつつ足もとどめず⑤

岡野直七郎

たえまなく鳥なきかはす松原に足をとどめて心静けき④

島木赤彦

蛇行する列のまんなかに彼もゐて、グイとふんばる足すぐそこに見る⑤ 渡辺 順三

高貴山おくれてのぼる足おもくたどりつきてこの家の暈うれしき 村野 次郎

高倉のなぞへの羊齒にすべる足ふみしめのぼるその羊齒の葉を② 熊谷 武雄

たかだかと繭の荷車を押す人の足の光りも氷らんとする② 島木 赤彦

高千穂の巖の神岳吾が妻も足は萎ゆとも攀ぢむとぞ言ふ 川田 順

高千穂をくだり来てここに足とどむ国つむら山あまつむら雲⑬ 斎藤 茂吉

高嶺にもはや来つらむか二荒山足のもとゆく雲もありけり 落合 直文

高原に足をとどめてまもらむか飛驒のさかひの雲ひそむ山③ 斎藤 茂吉

たがひちがひに今夜^{こよひ}ねむれり甥の足はわが肩ぬきて畳のうへに 坪野 哲久

竹筴つめたき上に腹這へどほてれる足はおかむところなき 窪田 空穂

田耕して土はいりたる足の傷床にいぬれば脈打ちて痛む 影山 一

高雄の街眼路のかぎりは断崖の我足のもとに一と目に見えつ③ 下村 海南

足

足

抱き上げて孫に見しむる夕虹の脚はまたげり海と山とに②

栲綱の帆綱手にとり立つ人の足もしどろに波船を揺る

だけに草しだれて咲けるたかはらに足のほこりを吾がはらひけり

章魚脚あげて修羅八荒のさませればうべ猛獣のなんぞか怖^{こは}ちふ

章魚の足を煮てひさぎをる店ありて玉の井町にこころは和ぎぬ⑦

戦ふ国の少年の群ぞもみぢ葉の峽行く足も勇みてぞ行く⑥

唯一人遠く遙かに見て寒し海を歩める棧橋の脚⑭

畳の上にぢかに坐れば足寒しインキの染みし机に向ふ①

立たむとし思ふやこの子わが膝をしきりにも踏む小き足して

佇ちあへぬ足の疲れよくらやみに椎の落葉のしるくかをれる①

起ちそめていまだ一月足ゆらにゆららに歩むまな児みどりご

たちどまりふとこそ思へ大地のこのわが足を吸ひも入れよと⑥

加藤 鏖次郎

正岡 子規

想田 禎司

北原 白秋

斎藤 茂吉

岡本 かの子

与謝野 晶子

斎藤 喜博

窪田 空穂

鹿見 島寿蔵

伊藤 左千夫

尾上 柴舟